

出たとしても、その真価を認められることなく看過され埋もれていく。さらに、インターネットで容易にダウンロードができる今日と異なり、当時、十六ー十七世紀の原著を直接、手にできる機会はきわめて限られていた。たとえ手に出来ても、次には言語の壁が立ちちはだかる。中村禎里先生は、こうした時代において、オリジナルな着想と緻密な検証に基づく確かな研究論文をコンスタントに発表し続けていた数少ない真の研究者の一人であった。そして、先生は、まだ無名の若者たちの研究にも真剣に向き合い、本質を突いた鋭い批評を加えてくださった。

先生は、「あとがき」で紙幅を割き、紹介者の拙論を紹介してくださっている。拙論はハーヴィの研究活動を、先生とは異なった観点と方法によって分析しようというものだが、研究開始以来三十年の間、先生は度々重い一次文献を鞆に詰めて運んできて貸してくださり、「禎里なんか踏みつぶして先に進んで行きな」と常に暖かい激励の言葉を贈ってくださいました。来年、創立五十年を迎える生物学史研究会は、生命科学思想に関連する多様な分野でいま最も活発な研究活動を繰り広げている四〇代、五〇代の会員たちを中心に活況を呈している。その多くは、こうした禎里先生の寛容な姿勢と励ましに力を得て研究活動が続けてきた者たちである。十六ー十七世紀科学思想史研究も、広範囲の原典を読み解き、欧米の学会誌に積極的に発表する二〇代ー三〇代の新しい世代によって文字通り新しい研究者層が形成されようとしている。

二年前に大学をリタイアされた先生は、今、日本の動物観・生命観研究から、インド仏教における生命思想へと、その研究活動を展開している。次に又こうしたテーマのご著書を紹介する機会が得られることを心から願っている。

(月澤美代子)

〔みすず書房、東京都文京区本郷五―三―二一、電話〇三一三八―四一〇―三二、二〇〇四年二月五日、四六判、三八四頁、定価四四一〇円〕

青木 純一 著

『結核の社会史』

青木純一『結核の社会史』は、一九〇〇年近辺から第二次大戦までの期間、すなわち全国の結核死亡率が対一〇万でおよそ一八〇と二五〇の間を大きくうねりながら、国家による結核対策が離陸し、戦後の急速な克服につながっていく期間の結核の歴史を検討している。これまで、結核の歴史は、医学史研究の中核となる問題を数多く提起してきた。マキーンが平均寿命の伸長の原因についてのテーゼを編み出したのは、十九世紀イギリスの結核の死亡率の減少の原因を推測する作業を通じてであった。ソントグが病気の隠喩の研究という豊かな領域を切り開いたのは、「自己の病」である結核と「他者の病」である癌とを対比させた考察を通じてであった。

このような古典的な名著を踏まえ、再興感染症として結核が話題になったことも手伝って、この一〇年ほど、英語圏においても日本においても「結核の歴史」が一つのブームになっている。

本書はしかし、近年のブームに乗った幾多の書物とは、性格が大きく異なっている。最も際立った違いは、その緻密なリサーチと、歴史的に確実な筆致である。著者が参照した資料は主題ごとに網羅的に掲げられ、重要な事項は手際よく年表にまとめられている。議論には要所要所で数的な裏づけが与えられ、インパクトがあって興味深い実例もふんだんに引用されている。(「結核落語」は一読の価値がある!)一言で言って、本書はプロの歴史研究者が学術書として書いた水準が高い研究書であり、一九九八年以来著者が発表してきた八つの論文に(単行本化にあたって「大幅な補筆修正」が施されているという)書き下ろしの章を一つ加えて成立した単行本であるという経緯を持つ書物にふさわしい水準が保たれている。このような研究者が近代日本の結核史研究に登場したことを心から喜ぶたい。

内容的には、副題に「国民病対策の組織化と結核患者の実像を追って」とあるように、大きく分けて二つの問題を取扱っている。そのうち、対策の組織化を扱ったのは、結核予防組織の活動を扱った二つの章(二・三章)と結核予防法の成立と改正を扱った二つの章(四・五章)である。これらの章の間にはタイトな論理的な構成があり、一貫した説得力があ

る議論が展開されている。一方、結核患者の実像を扱ったと推察されるのは、東京市結核療養所を扱った七章、結核患者自身による自らの病気の理解を論じた八章、結核虚弱児と養護施設を扱った九章である。これらの章は、独立した章としてはそれぞれ優れた論文である。特に第七章は出色であり、東京市療養所への反対運動を、神奈川県二宮の私立の療養所への反対運動と対比させて鮮明に描き出し、また療養所への入所者の実態を統計的に跡付けて論じている。しかし惜しむらくは、章の相互の連関が曖昧になっており、これらをつなげて何を議論したいのかわからないこと、その結果、書物の後半が前半と切り離された散漫な印象を与えていることである。

書物の後半で議論の焦点がぼけたのは、この書物全体の狙いについて考え直し、それを説明するという「前書き」で行うべき作業が決定的に不足しているためである。それと関連したことであるが、「前書き」で近代日本の結核についての先行研究や医療と病気の歴史の研究書が数点上げられているが、それらを踏まえてこの書物全体の特色は何かという説明は皆無に等しい。さらに、同じ時代の日本の結核対策を、著者とよく似た視点で扱って高い水準の分析的な議論をした書物である William Johnston, *The Modern Epidemic: A History of Tuberculosis in Japan* (Harvard University Press, 1995) は、近年における日本医学史の最高の成果の一つであるにもかかわらず、本文はもとより、文献注において

すら言及されていない。「あとがき」で著者が書いている「多少、オタクと言われながら結核の研究を続けた」という言葉は、研究者がさまざまな領域で孤立して医学史を研究しているため、領域を超えた情報交換をすることが難しい、日本の医学史研究の組織的な問題を象徴している。

このような欠陥はしかし、この書物全体の価値から見たら小さなものである。本書は、日本の結核対策の歴史を研究する者がまず熟読しなければならぬ情報の宝庫として、そして高い水準のリサーチを示した研究書として、これから長きにわたって活用され続けるに違いない。

(鈴木 晃仁)

〔御茶の水書房、東京都文京区本郷五―三〇―二〇、電話〇三―五六八四―〇七五一、二〇〇四年三月二十八日、A五判、三七六頁、定価五四六〇円〕

高島 文一著

『鍼の道——内科医の青春』

著者の父君は岐阜県旧家の生まれ、二十歳過ぎて眼疾を患い、ついに失明したという。止むなく日本最初の京都盲啞院に入つて鍼按の術を学んだ。しばらく母校の助教諭を務めたのち、大正五年鍼を専門として京都市内で開業し、そのすぐれた施術により、門前市をなすほどの盛業をきわめたとい

う。昭和二十九年惜しまれて逝去されたが、著者は大正二年この父のもとで京都市内で生まれている。市内の初音小学校、府立一中、浪速高等学校に学び、昭和十四年三月京都市帝国大学医学部を卒業して医師の道に進んだ。

この間に教えを受けた恩師、共に学んだ同級生、同僚、何らかの交際のあつた人々について、そのフルネームをあげて、なつかしい思い出を語っておられるが、その記憶力のすばらしさには一驚する。これは著者の並々ならぬ知能の他に、常に恩師には敬愛の念で接し、同級生には深い愛情を持って付き合ひ、軍隊や病院における戦友・同僚には親愛の情をもつて尽くしてこられた著者の暖かい心根によるものである。

著者の生涯の進路は、父君の夢であつた「鍼の根柢を医学的に究める」ことにあつたから、それを目指して医学の道に入られたが、時代は決して平坦な道ではなかつた。

おりからの戦争は著者を思わぬ道に踏み込ませることになつた。

内科医局に入った著者はまもなく、おりから設立された傷痍軍人療養所の医官として赴任することになり、さらに応召して軍医見習士官となり、フィリピンに送られ、野戦病院で診療にあたる身となつた。診療に従事する間、自身結核が発病して内地に送還され入院生活を送ることとなつたが、現隊はレイテで全滅して、実に九死に一生を得ることになつたのである。軍医時代の話はこれだけで一編の物語とな